

貧困の三角形－貧困の三角形を描く、

2. 貧困の三角形

イギリス由来の貧困概念は、貧困線を設定し、それに満たない低所得状態として定義されている。近代以降、市場経済の席捲する時代を迎え、人間生活は市場に覆い尽くされつつあり、生活物資の交換システムの主要な部分は財市場となっている。（共同体的な交換ルール、所有のルール、相互扶助等の機能する社会もあり、主に発展途上国に存在している。）

人々の生活を覆い尽くす高度産業化社会の財交換の市場においては、貨幣こそが財市場に参入する手立て、権限の源なので、所得情報、貨幣の実質的所有量によるアプローチは、有効な貧困へのアプローチであり、今尚そうであり続けていると思われる。

① 貧困と不平等問題

1998年のノーベル経済学賞を受賞したアマルティア・センが考案した、低所得情報から貧困度を導く社会的厚生関数である貧困指標、「セン測度」は、貧困とは絶対的貧困と相対的貧困（不平等問題）が重なり合っている事象である事を、数理的に顕かにしている。

その一方の絶対的貧困とは、生物学的生命の維持ができない程の生活物資（食糧等）の不足（低所得状態）と定義されているが、レヴィ＝ストロースの言う自然と文化という2項対立関係を受け入れれば「自然状態における人間の要求」「自然（生物）的要求」に対する窮乏（欠乏）と考える事ができよう。

そして他方の相対的貧困は、その社会の平均的生活様式を生きる人々と言う他者との比較において始めて問題になるのであり、社会的文脈の内にある欠落感、剥奪、排除などと表現される格差、不平等問題と考えられる。この貧困は社会内の他者との関係に規定される「社会的要求」に対する窮乏（欠乏）であり、社会の規律を受け入れた文化の状態に移行した人間における、「文化的要求」に対する窮乏（欠乏）と考える事ができよう。

人間においては、社会的要求は文化的要求と循環的であり一体的と考える事ができよう。

相対的貧困は社会を形成し、文化の状態に移行した人間の文化的要求への窮乏（欠乏）であり、この文化的要求が人類史、数10万年の時の経過を経て、多岐に渡り重層化し範囲を広げて不平等の構造を形成して、産業構造や地域の風土にもより、時代とともに変化している。特に「熱い時代」などと言われる、近現代の高度産業社会においてその変化は加速され、その先端たるグローバルな経済活動が席捲する現在、21世紀にあつては、その様相はこれまでにない規模と、テンポをもって変化しつつあると思われる。

この不平等問題は、20世紀には所得情報による実態把握で示されたが、21世紀の今日では、「社会関係性」に焦点づけて多焦点的な人間の生活情報による「社会的排除」の把握が

進められており、この問題が貧困実態、貧困の把握として注目されている。この貧困への対応は、排除／包摂と言う構図で、各国の政策課題となっている。

「社会的排除」は不平等の進行を、個々の人間の形成している社会関係に焦点づけて力動的に捉える概念として、「相対的剥奪」の延長上にあり、その関係については「相対的剥奪指標」と「社会的排除指標」を比較対する時に、その項目の類似性、そして拡大の方向性が、何よりも雄弁にそれを語っているのではないだろうか。

② 貧困概念の枠組み

貧困概念は一部不平等問題を含んでおり、不平等問題と同様の特徴を抱えている事は知られているが、貧困はいわば不平等を「入れ子」状態に抱えている概念であり、そのため貧困は、社会の所得分布の動きに従い、様々な様相を呈して、時代や地域によって焦点を異にしながら拡大、或いは縮小するといった、変化しつつある概念と考えられる。

そして貧困を規定する事象は、人間生活を構成する多焦点的な具体の現実である所から、貧困問題は同時代を生きる人間の悲惨を対象化するという、最も規範性を問われる問題構成であり、論者それぞれによって立つ価値規範性を反映せざるを得ない問題と考えられる。

そのため貧困概念は、

1. 時代、地域によって異なってくるので、変化を織り込んだ概念構成とならざるを得ず、現実の貧困の様相を背景に、統計手法による実証的把握などの具体性を求められるであろう。
2. しかしながら自然的生物学的な要求への窮乏、絶対的貧困を避けては構成できない。なぜなら絶対的貧困は、死すべき運命を生きる人間にとっての最も重要な問題として、歴史時間を越えてのがれようがない問題として引き続かざるを得ないであろう。
3. もう一方の人間の文化的要求は、ますます拡大し複雑化して展開し、すべての生活分野を覆い尽くしているところから、その要求への窮乏は多焦点的な事項によって規定されざるを得ない。そしてこの要求への欠如は不平等問題としてあらわれている。

この3点を織り込んで、歴史的に提示された貧困概念、その互いの関係、変換の構造を読みとる事により、その内容がより明らかになるのではないだろうか。

③ 2ビットで考える構造

貧困、あるいは絶対的貧困と言うべき事態、食糧の枯渇、この貧困状態は、人間が原始の状態において多く遭遇する事態であろうが、文化の状態に移行してからも「人々にそれと認められつつ」広範に生起する事態である。

レヴィ＝ストロースの言う「それぞれの時代において人間性の限界とみなされている地

点に立って、人間を研究する事にある¹。」と言う文化人類学のテーマを下敷きにして、文化の状態にある人間生活を眺めるならば、貧困は人間が社会を形成してからもなお、天災地変と社会的（文化的）要因が重なり合う状況、人間の社会生活上の齟齬（不平等）を含みつつ、今なお人間性の限界を超える事態、飢饉や飢餓が繰り返されていると考えられる。

レヴィ＝ストロースは、自然から文化へと移行する過程で、おそらく初期に人間の思考が獲得したであろう「婚姻規則（インセストタブー）」については、「親族の基本構造 87 図」において示し、食べ物に火を入れるという「火の使用」については「料理の三角形」において示しており、其々の構造を 2 ビットの「無意識的な 2 項対立」による変換構造とする。

またレヴィ＝ストロースの研究は「野生の思考」から、さらに神話研究へとすすむのだが、その理由として、自然から文化への移行の様態、異なる二つ（自然と文化）の間を繋ぐ蝶番（ちょうつがい）を包む構造といったものは「無意識と言う形で、人間の精神に現存している。」としても、その事が親族構造では確認できなかったの、社会生活上の外約規制のより少ない神話研究へと向かったとしている²。

この表現からは、親族の構造は確認が困難なほどに複雑となった構造である事が伺われ、「親族の構造」は「婚姻規則（インセスト・タブー）」を受け入れて世代を重ねる中で生成され促されたものであろうから、「婚姻規則（インセスト・タブー）」を起点に世代を経た展開過程として、その構造は変換を重ねて複雑化しているのではないだろうか。

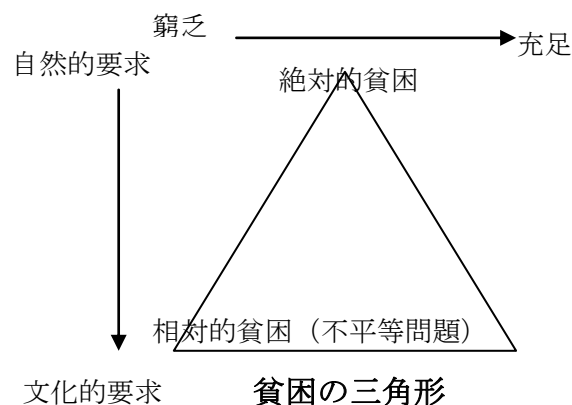
また言語はヤコブソンの 12 ビットの 2 項対立のセット（群）の音素で構成されていると言う、2 ビットより数段に複雑化した構造である。

では貧困の構造はどうであろうか？「婚姻規則（インセスト・タブー）」や「火の使用」の生の肉、焼いた肉の対立関係と同じに、自然と文化の双方を跨いでいる事、絶対的貧困と言う生物学（自然）的条件からの要求の基底性、不平等問題と言う文化的要求の広汎性を考慮すれば、「2 ビットの二項対立軸」と考えてよいのではないだろうか。

④ 貧困の三角形を描く

レヴィ＝ストロースは、ヤコブソンの母音三角形、子音三角形をならい「親族の構造図」（前出）を書いている。

「貧困の三角形」を描くとすれば 2 ビットで右図のように構成されると思われる。



¹ レヴィ＝ストロース 中沢新一訳『パロール・ドネ』P41 講談社選書 2009年6月

² 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』P117 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

貧困とは、人間生活における諸要求に対する窮乏（欠乏）の状態を指しているので、横軸は窮乏（欠乏）の程度を表している。

人間の生活は自然状態から文化の状態へと移行しつつ、文化的要求を複雑化、多重層化、増大させつつある。そこでこの図の縦軸は、人間生活における自然の状態から文化の状態への移行の過程、人間生活における「自然的要求」から「文化的要求」への推移を示している。文化的要求への欠乏は、不平等問題として相対的貧困と重なる。

そう考えると、右上（前ページ）の図のような構成となる。

死すべき運命を生きる人間にとって、絶対的貧困という食糧の枯渇を主とする生活物資の窮乏、餓死、凍死は、歴史時間を越えて永遠に逃れる事はできない問題であろう。

そしてその一方で不平等問題は、20世紀には基本的には低所得として捉えられた相対的貧困であったが、21世紀グローバル経済の席捲する時代、共同体の解体、先進国労働市場の不安定化の中で、社会関係性を軸に捉えられる「社会的排除」として現れている。

この三角形は、底辺部分の変換によってつぎつぎと三角形を生み出すような構造であり、それらの重ね合わせとして示す事が出来ると思われる。不平等問題は時代の動きの中で通時的な変換を行い、多岐にわたり範囲を広げ、互いに重なり合い、底辺は底へ底へと続いてゆく末広がりとなるであろう。

不平等はその焦点を、低所得から「主要な社会関係からの排除」、「社会関係の不十分性」などと移り変わり、「相対的貧困」から「社会的排除」へと変換していると思われる。貧困の三角形は、次々にページを捲ってゆく構成となると思われる。

— 社会保障制度への示唆へ —